

いのちを ささえる うた と ことば
トークリサイタル

第1部 講演「私を救った出会い」

第2部 「ハートフルリサイタル」

講師 **新垣 勉**

2016年4月23日(土) 佐賀市文化会館



熊本、大分地方を襲った地震の影響が心配されましたが、佐賀市文化会館には1千名以上のお客様にお集まりいただき、テノール歌手、新垣勉さんと素晴らしいひと時を分かち合うことができました。

米軍統治下の沖縄、地元女性と駐留米兵の間に生まれた新垣さん。生後間もなく不慮の事故で失明してしまいます。また1歳の頃に両親は離散、祖母のもとで育てられることとなります。貧しい生活の中でもいつも楽しそうに歌をくちずさむ祖母のもとで元気に成長する新垣少年、今にして思えば最初の歌の先生は祖母であったと、沖縄民謡の解説をわかりやすく交えながらお話いただきました。

盲学校で「しゃぼんだま」の歌を階名で覚える宿題ができずにしよげる自分に音階を覚える方法を教えてくれた先輩、それが結果として絶対音感を会得することとなった、そんな小さな言葉や出会いが自分を発奮させるきっかけとなり、その積み重ねが人生を形作ることになると新垣さんは言います。

14歳、祖母が亡くなると新垣さんの人生は暗転、自殺を図る心境にまでなってしまう。見えない世界、親に放り出されたこと、天涯孤独、差別、自分はいくつ不幸を抱えていかなければいけないのか、この世にいてもいいのか、そんな思いの間を歩きつ戻りつしていた、と振り返ります。

そんな新垣さんを救ったのも「歌」でした。ラジオから流れる讃美歌に導かれるように訪れた教会で出会った牧師に「大人になったらアメリカに行って父を殺してやりたい。」との思いをぶつけますが、牧師は何も言わず、ただすすり泣く音が聞こえるばかりでした。新垣さんは言葉にならない言葉で自分を受け止めてくれた牧師に「こんな赤の他人の自分のことを受け止めてくれるのだな」「自分なりに生きてみよう」という思いを与えられたのでした。

また、プロ歌手となる決断を後押ししてくれた世界的ボイストレーナー、A・バランドー二師からの「君の声は神様からのプレゼント、その声で多くの人を慰めなさい。」との言葉も、今までマイナスばかりだと思っていた自分の血と身体が実はプラスの宝物なのだ気づかせてくれ、両親に対する憎しみがゆっくりとほどけて行くきっかけとなった、人生にとって最も大切な言葉、出逢いでした。

新垣さんは34歳から武蔵野音楽大学に進みさらに音楽を極めます。少し遠回りした人生ではないですかとの問いに、例えば職業のために鍼灸師の勉強をしたこともあります。それは声楽を学ぶうえで必要な身体の構造を理解することにも役立った、人生に無駄なことは一つもないと思うとお答えされました。

第二部、ハートフルリサイタルでは平和を愛する作詞作曲家、寺島尚彦さんの「ひとつだけの命」「さとうきび畑」など9曲を披露。中でもピアニスト齋藤誠二さんがフルートもお得意、ということで新垣さんがピアノ伴奏、齋藤さんフルートでの「川の流れるように」のサプライズ演奏は大いに会場を沸かせ、新垣さんの温かい人柄と茶目っ気をうかがわせてくれました。

主催：公益財団法人 住友生命健康財団

後援：佐賀県、佐賀市、佐賀県教育委員会、
佐賀市教育委員会、佐賀新聞社、西日本新聞社、
一般社団法人 佐賀県視覚障害者団体連合会、
住友生命保険相互会社 佐賀支社